

詩をなぜ？書く

伊藤正斉の意見

伊藤正斉

もろもろの悩みも消ゆる雪の風

和田久太郎が獄窓で縊死したのは、昭和三年二月二〇日。私の十六才のときである。私はその前の年の十五才のときから俳句を作りはじめていた。それというのは、私が十四才のとき、製陶工場五陶園という小さな窯屋に小僧（丁稚）に入り、小僧部屋と一緒に寝てた下働き（雑役夫）で俳句を作っていた日高輝水という、風来坊で頑固ものの四〇くらいの男がいた。彼は誰とも時の挨拶以外の言葉は交さなかった。いつも俳句を投句していた俳句雑誌「山鳩」とか「アオミ」とかいう雑誌を読んで、ときどきにんまりと一人で笑っていた。いつしよに働いていた人達は、あのだ、気狂いめと、気狂いあつかいをしていた。月に一回近くの地区の俳句会に出席するのが、

たった一つのたのしみだった。彼がどの生れか誰も知らなかった。私は彼に俳句の雑誌を貸してくれるよう頼んだが、子供なんかには解らない本だ、といいつて貸してくれなかった。

しかし私は彼の留守のあいだに、こっそりと雑誌を出して盗み読んだ。私は小学校の四年五年の二年間教えてもらった、独学で博士号までとった松田好夫という先生に、短歌や俳句を作る手ほどきをうけていたので、少しは読んで理解することができた。盗み読みしているうちに、私も俳句を作ってみようと思ひ、ひそかに作ってみた。その中の十句ほどを日高に見てもらった。日高輝水は私の俳句を読んで、なぜか手をふるわせていた。批評をしてくれという、おまえはどこで俳句を作ることを覚えた、おれよりうまいじゃないか、今度俳句会につれていってやる、といつて、十二三人ほど集まる俳句会につれていってくれた。私ははずかしかったし、少年の私が出席するような雰囲気ではなかった。課題句と雑詠を合せて、五句ずつ出して互選をす

るという形式のものだった。はつきりした記憶はないが、私の俳句が可成の点数をあつめたことはたしかであった。以来少年の私は大人たちにもはやされ大切にされた。しかしそんなことが、五陶園の主人（旦那）に知れ、小僧のくせにというので、お叱りをうけ、半年ばかりで俳句づくりはやめてしまった。そればかりではなく、その頃、中学校の通信教育で講義録と一緒に送ってくる付録の雑誌に詩を投稿しはじめていたということもあった。それから二年後、和田久太郎の「獄窓から」に本屋でめぐりあったのだ。改造文庫をばちばち買い集めていたので、「獄窓から」という本の題名に興味をおぼえて買ったものだと思ふ。読みはじめたら面白くて、なんべんもくり返し読んだ。幸徳秋水、大杉栄、荒畑寒村、片山潜、堺利彦、山川均等の著書を手当たり次第読みはじめた。文学書も葉山嘉樹から中野重治というように読みあさった。

弾圧がはげしくなり、「詩精神」も「文学評論」も「詩人」も廃刊になった間に、小作田の坪刈反対、製陶労働者の首切反対のビラ貼り等の実践活動で検挙されたりした。左翼運動が弾圧されて、日中戦争がはげしくなる昭和十二、三年頃発行されていた、数少ない

詩雑誌に「新領土」があった。私は藁をもつかむおもいで同人に加えてもらった。私は昭和十五年八月に兵隊にとられるまで、「新領土」に作品を書きつづけた。私は「新領土」にいる間にイギリスの左翼系詩人の幾人かを知り、瀧口修造の名著「近代芸術」（三笠全書）からも影響を受けた。この本はぼろぼろになっているが、今もときどき出して読み返している。

昭和十五年に兵隊にかり出され、中支、満州に四年間ほどいて一応帰ってきた。帰った直後、特高警察に身柄を拘束され起訴となったが、二度目の召集でそのまま、中支浙江省杭州へ行った。昭和二十一年四月に杭州から帰還。日本電氣に再就職、労働組合の専従者として、瀬戸東京間を往復。新日本文学会入会。日本共産党に入党。日本共産党除名。という遍歴は、私が生きて詩を書いていたことの裏表で、それにとまとう自己批判（自己嫌悪）と方法を考えてきた。現実の体験と詩作上の方法がかさなるが、その三、四を重復するがあげてみる。

群生

西 杉 夫

押し、重なり、ぶつかる。
斜面にどつとあふれかえって
つくしのすさまじい発生ぶりだ。
伸びきって弱りはじめたの下からは
固くしまり、におうように水々しいのが
まっすぐ頭をつきあがる。

丸太を組みあげて鉄条網、
高いへいと立入禁止の立札。
わずかのすき間を見つけてわたしは入った。
ニュータウンという。
自然を根こそぎふみくだいて
平に、四角く、均一に。
だだっぴろい赤土のひろがりのなか、
ここだけ生きてざわめく。

突然まきおこる風に
胞子がいつせいに舞いあがって
黄色い筋となつてたまたよい、
一転、天をめざしてかけあがっていった。

①和田久太郎ばりの俳句を作りながら、あまりにも和田久独自の体臭が自分のなかにしみこんでしまい、模倣のいやらしさに嫌悪を感じて俳句づくりをやめてしまった。

①多くのプロレタリア詩を読んで、観念的で画一的な、政治にふりまわされたような詩は作りたくないという（ばくぜんと）思ひのなかで、そのような作品を書いている人はいないかと読みあさっているうちに、中野重治、森山啓、伊藤信吉、金子光晴、北川冬彦の作品にであつた。今から読み返すとまったく幼稚なものではあるが、そういう意図で作った詩のいくつかは、「詩精神」関西文学（三谷秀治編集）京都の野火等に発表した。

①「新領土」に同人として参加し、多少のモダニズムの影響はうけたけれど、できるだけ自己流のウィットで情況に対する怒りをぶちまけた。

①日本共産党に入党。シュルレアリストからコミニストに転向した、ルイアラゴンや、エリュアールからの影響。サークル詩運動。労働組合のなかの日共のフラク活動、等々、私の詩が、もともと啓蒙主義的で、類型的な期間であつた。

「プロレタリア詩の啓蒙主義を否定するかの

言いてたものだろう。その通りで書かずに
はいられないというのが本音である。

父は一ヘクトール足らずの小作百姓で、秋のとり入れの米を年貢として収めてしまうと、後どれほど残らない米をながめてぐちり、酒を飲んでいいるあわねな様をみてきた幼いころの私は、何とか早く仕事をならって金をもうけようと思った。しかし今日迄生きてきた私の自己史は、投獄、徴兵、安給料の陶器職人で、その目に焼きつけられたものといえ、金もうけのためにはどんな非人間的なことでもやつてのける奴ら、天皇と天皇制、国家とその権力者、それらをとりまく政治屋どもである。この元凶たちに対する怒りと憎しみは、テロルをもつて立ちむかうべきだと、思いつめたこともあつた。しかし臆病な私は、徴兵されても拒否もせず、野戦にあつても脱出することも出来なかつた。その上、労働組合のなかで、日共のフラク活動家として何をやつたか。われながら自分のなかにしみこんでいる天皇制の血に目まいする思いである。

石油にひっかけて、原子力発電所の増設を
強行しようとする電力会社と政府。目にみえない空のかなたを、放射能をふりまいて飛び

ように見えながら、なお詩を書くときは、詩による啓蒙を役目と心えて（はつきり自分のそれに対する理解を考えもせず）かつての時と同じつもりで書いている人も意外に多い」と「コスモス」六七号「コスモス」の感想」で秋山清は書いているが、このことは自分の詩作の過去と現在を省りみて、はっとする思いで、いそいで自作を読み返したりした。

ながいあいだ詩を書いてきたあいだには、なぜ詩を書くのかという自問をしたことなどはないとは言わないけれど、あらためてどうだといわれると、むづかしい問題である。それはこの特集がはじまり幾人かの人の書いたものを読んでわかる。詩を作るより田を作れということとは、一銭にもならぬ詩を作るヒマがあつたら、しつかり米でも作れということだろうが、私はそんなことを考えたことはない。錦米次郎は「三重詩人」一〇四号の「三重詩人史」で、「伊藤を論じるには伊藤の詩と政治、戦争、陶工と百姓という諸要素を綿密に踏えてかかる必要がある」と私は思う。その上に立つて陶よりも詩が本業だと大見得を切る伊藤が坐っている」と書いているが、私にとって詩作は、メシよりすきということをや

交う人工衛星。資本主義の国も、共産圏の国も、互いに原爆の製造競争だ。民衆の生命と生活は無視したこれらを、一人の民衆としてゆるすことはできない。私のささやかな抵抗は、私と同じ考えの民衆と連合することを望みたいけれど、無理に押しつけようとは思わない。それが私のなぜ詩を書くという根本である。おわりに私が最近読んで感銘した、中野重治の言葉を紹介しておきたい。

「詩を書いたそうだがよく勉強するのがいいでしょう。詩は説明でないといいことが大切だね。笑い声、ほほえみ、汗、涙、あくび、そんなものに似ている。汗は何も語らぬが、語らずしてただ顔に浮ぶことにおいて地におちることにおいて一切を語っている。詩は何ごととも説明せず、しかし一切を語るものでありたいね」

これは一九三四年春、豊多摩の獄中から、妹鈴子に書き送った手紙である。これは「コスモス」六五号の中野重治記念で「詩人・あにいう」と題して書かれた、大牧富士夫の追悼文のなかから抜いたものである。

ともかく私の身辺、情況は、私に新しい角度で、観察することを要求している。

詩をなぜ？書く

ごく一般的に

小宮隆弘

詩をなぜ書くか。ちょうど一年前村松武司さんから同じようなことで依頼の手紙がとどいた。その時は突然であり日にちがなかったし、自信もてなかったので詩を書くのが精いつばいだから、といってお断りした。先の在京同人会記録によると二十九号には、小宮、伊藤、野口に依頼としてあった。

村松さんからの依頼のときも、そのことにについて考えてみないわけではなかったが、お断りするのだからという気持だったので、そう深く自問してもみなかった。今度は有無をいわずに書けといわれているようで、どうしても問いただしてみなければならぬ、と気負ってみたがなんにも結論みたいなものを引きだすことはできない。

「あなたは詩を書くねえ」ときかれることがある。私は「うん詩といえるかどうか知

らんが、そんな風なものば書いてるたい」とこたえる。そんなとき決つていわれるのは「よい趣味をもっているねえ、よい道楽ですたい」と、詩を書いているのが趣味で、詩集はおこるが、一般的にそういうものか、それ以上詩への話の深入りはしない。

もう二年ぐらになるか。第三詩集を出したときのことであつた。『耕』の同人三人一緒に地元の新聞に紹介された。当時私はつるはし、スコップをにぎって現場作業に就いていたので、多くの労働者が周囲にいて話題も多かった。そんな中で、新聞をみたというひとりが「小宮さん詩集を出したげなね」「うん出したたい」とこたえると「大体あんな本を出していくらぐら儲かるかね」という。「儲かるかね」といって一銭も儲からん。全部手出したい」「その金いくらぐらいかつたつね」少しうるさいとも思ったが「買つてもらつた詩集代を差引いても五十万円を越す赤字ばい」「そうね、でもあなたは車を持たん

からそのくらの経費は安いもんだい」私たちの職場は私たち五十代の一部を除いてほとんどの人たちが高校を卒業している。話かけてきた労働者も例外ではない。そしてまたほとんどの人がマイカーで通勤している。

かつて詩をはじめた頃、労組の機関紙やカベ新聞に書いていた時があつた。いまおもえば足が地につかぬ薄つぺらな思想の先走り、要請詩といえるものであつた。書いた本人はその詩が活字になり（ガリ版刷りであつたとしても）掲示板に貼られると得々となつていたのであるが、その詩が一行のスローガンとどのようなちがつていたであらうか。

その後もこのような詩はながくつづいた。ノートに書きつづつていっているものには見当らぬが、なにかに発表した詩にはそれがあつた。

古い詩作ノートをひろげてみる。二十一才の八月、欄外の雑記に「生と死と、愛と憎しみを説いた人が自殺したことを知った。私はどのように、この人の説いたものを読むべきか。悲しいため息を吐く。その時誰か背後から鋭い刃物で私を殺してくれたら、と思う——」というのがあつた。ところが翌年の三月には幼い詩とはいへ読むに耐えないような詩を書いている。国家権力、支配勢力に対して

刃向う元気のよい詩を。この間前年の九月に政党と関りをもつようになったのを別のノートでまとめられたが、なんとという変わりようであらうか。

このような詩への構えようをしていた頃、私を決定的にしたのが、壺井繁治詩論集「抵抗の精神」であつた。私の手元にある詩集や詩論集では最も古い本で、仙花紙とかいう粗悪な紙に刷られたものであつたが、しおりがわりにはさんでいる四円ハガキには読了した月日を四回も記入していることからバイブルのようにしていたのであろう。この詩論集の（あとがきにかえて）に壺井繁治は「僕は今日まで二十数年間にわたつて、詩を書きつづける一方において、批評活動をもつづけてきた。そして僕の詩にしても、批評にしても、僕をとりまくもろろの社会的現実にはたいする抵抗の精神の表現であつたのである。だから、もしも、詩的精神とは何であるか、と人に問われるならば、僕は、それは現実への抵抗の精神である、と答えたい——」と。いま再びこの詩論集を読みかえしてみたとして、生のみこみをして血気にはやつていた時代のような感情のたかぶりはあるまい。それからずつと後で、十年ばかり経つて、壺井繁治詩

集」を手にして「仮面」という詩をよんだときは異常なまでに自己嫌悪におちいつた。そしてその詩を玄関の壁に張りつけていたのだ。壺井繁治はこの「仮面」について、これもあとがきの中に「仮面」は僕に対する『戦争責任』の批判がおこる前に書かれたものだ。戦後の一時期、僕は人々に知られている通りのあの『解放的機運』にいい気になり、自分の『戦争責任』の問題を内部的に処理することをおろそかにした」と、私は壺井繁治が戦時中にどのような詩を書いたかはそれまで知らず、前記した詩論集を暗記するようによんでいたのであつた。

ついこの間まで、私は私の戦争体験から出発した詩を書いていた。（浜口国雄などのすぐれた詩があるのに）なぜ、そこには罪ほろぼしという意識があつた、と同時に後世にのこしたいといった思いあがりのようなものがないのはなかつた。さきに出版した詩集にしても、家、財産なんにもないので、子どもたちへのただ一つの遺産として詩集を出した、などと口はばつたことをいつてきたが、おやじの詩集に子どもたちがどれ程の意味を感じたか、理解をよせたか、父親の不遜というほかない。

ある新聞に「老人と健康」の特集がのつた。それによると老人大学などの教養講座で俳句や短歌をおしえるより、詩をまなばせた方が脳の老化予防になる、ということであつた。『コスモス』のほか書く詩誌をもたない私は、まだ老人といわれる年令ではないにしても年に三、四篇の詩作では「老人と健康」の論にしたがつても老化予防のための薬の一服にもあたらないだらう。

詩を書く。それが三、四ヶ月に一篇であらうと、言葉をくずし構築していく作業をくりかえしているときの私は、日常生活の多忙さの中で見わすれがちな自分をみつめている時間である。この詩を書く時間が生きていることへのなにかであることに間違いはない。

『鎮魂歌』

植村諦詩・論文集

一七〇〇円

コスモス社で扱っております。

前号作品評

黒川 洋

前号作品評に対する私への異見は私なりに読んだ。私の受け持った号について、その作品に触れる時、テーマの積極性(主体と素材)のようなものを念頭に置かざるを得なかった。それがために素材の新鮮さともいえるのか、そんなところにはばかり眼が向いてしまったようだ。それは私自身の中に素材主義への執着があり、まだ詩に何か大きな期待が出来るものとする甘ちゃんな部分があるに違いない、そのことに気づかされただけでも私には大きな発見であった。編集者の意図としては作者に言いたい放題を言わせれば同人たちも少しは活気づくのではないかという想いがあつたにちがいない、その想いが効を奏したかどうかは私の預かり知らぬところで、ただ私自身を抱えていたひとつの問題点がふつきたという形で、編集者と同人たちに感謝したい。それは昔、『横浜文学』で一緒にやっていた東野伝吉、松永浩介、田木繁、中野重治を結

ぶ絵解きができたということである。前号評について『雑記』の近藤計三の意見にいきさかの弁解をさせてもらえば、『新世界は……』についての反論は私の側の見落しなのだろう。悲しいことには私はハックスリーという人の作品に触れることに無縁であつたということであり、残念ながら不勉強をさらすしかない。28号の作品群では同人各自の持つ定型のようなのものがぐずれかけている作品が多く、なりとふりのようなものが割と距離感もなく、作品として結実しているように思う。

「ひとこと」(松永)は中野重治への別れの話で、たぶん、通夜の席での情景で、(ざんねんです)という言葉は同時代を敬愛をこめて来た者の余韻がある。

「大阪〇一夜」(伊藤)は東の秋山、西の小野への敬愛の念が下敷きとなつてゐるのだろう。ハレー彗星と合唱したという情景が事実とすれば、読む者の側にカリスマ的な印象を与えかねないのではないだろうか。

「同行四人」(向井)は実際は同行三人である」と推論するのである。(へにぎりめし三つ)という表現に少しばかり破綻を感じる。ここでふう、うん、さんは向井の分身であろう。作品の冗長さが関西弁の会話を救われている。向井の

戦略としての状況の捏造のようなものを感じて面白い。

「再検」(小宮)は我が肉体に固執する胃袋談議と襲つてくる不安を終連で結語している。

「電小の小を考えた朝」(寺島)は詩としての世界観が良く伝わつてこない。というよりもこれは寺島のひとつの疑問に固執する姿勢なのかもしれない。

「日々是好日」(近藤)は近藤のもつ定型が崩れ、自己撞着の苦さを良く描出している。戯話の境地とでもいうのか。佳作である。

「異化」(申)は朴の暗殺という事件から触発されており、なお続くであろう暗い時代への予感ともいえるのか。

「カマボコ」(高島)は関西の詩人達とのいち日であるが、作品の冗長さが気になる。高島らしい視点ではあるが。

「寒い風」(暮尾)は作者にしてはめずらしく冗長な作品である。(みんな連鎖になつて言葉や風景を食べてきた。)なんて句につき当るとニヒルになつてくる。俺つちやつぱりフロックな世代なんだろうか。

「省略」(西)は現実から超現実への狙いを意図されているのだろうと思う。作者の想いが省略されすぎていて驚きが伝わつてこない。

蝾 螈 (いもり)

山野 千 工

風が吹くと
水面に小波が立ち
池は銀色に輝いてみえた
近くの小川には
いつも蝾螈が平たい石の上で
昼寝を楽しんでいた
学校からの帰り道
その池が見えてくると
家に帰つたような氣になつて
しばらく蝾螈の昼寝を眺めてゆく
あの時
蝾螈はじつと動かず
石になつた夢でもみていたのだろうか
今池のあたり
家がいつぱいに立ち並び
蝾螈は
あのまま夢を見続けて
石の住人になつてゐるかもしれないのだ

「戒厳令」(村松)は向

井の「同行四人」と発

想は似ているが、むし

ろ村松の内部の日本人

と韓国人の自己分裂と

でもいうのか、東の間

の幻視(半世紀)をド

ラマ仕立てで構成して

いる。村松と幼なじ

みの韓国人の語りを配

し、二連はほとんど村

松の独自の形で食堂の

情景を挿入し、(たつ

ている。

「赤っぽい土星」(秋山)は作者が時折、作品

で見せてくれる、遠くの事実より、身近な事

実を重視するところから始まる手法であり、

それさえも不可解な日常というものがあつて

はないかという視点である。久々に秋山らし

い作品に出逢つた。

「さざんか」(北本)は好きな作品だ。何も書

くべきではない。

「木の瘤」(押切)は作者にしてはめずらしく

極私的な作品であり、小品である。

「異邦人」(長谷川)は違和感を求めて、「オ

レは南の旅にきた」と旅の目的をめざらしく

吐露する。松永浩介が登場する小品。

はなしの自由席

佐藤政夫詩集

『落書』

吉田 欣一

「近作一束」(木原)四編のうち「無可有郷」は小野十三郎の「消えた村」の現実版として悲しく共感を呼ぶ。「寒椿」は木原らしい日常のなかでのある予感を秘めていて好きな作品である。

「選りによって」(宮田)無名の隣人に寄せる想い、死がひとつの課題となっていて見過されやすい視点であると思う。

佐藤政夫の出した詩集「落書」を読み終った時に思わず大声で笑い出した。自分にも不思議なくらい実にからっとした笑いであつた。

「菊」(北本)「さざんか」と比較すると素材のせいがか力が入りすぎている感じがして、(そいつをどうする)の二行が破綻となり、気になるところである。

一冊の詩集を読了してのこんな経験はないのでないか。この詩集『落書』の著者が真面目に一生懸命書いていることが読者を笑いへきそいこむものがある。

今回は多忙さにかまけて、私自身が力つきてしまった。これ以上の時間を取ることが出来なかった。それぞれの作品に対して見落しや配慮の手抜きが多々あると思われる。私自身が醒めすぎているのか、読解力が不足しているのか、とにかく印象評程度に納めるしかない。向井と村松の方法のようなものが勉強になった。近藤、北本、押切、内田、長谷川の作品にまとまりを感じる。

(一九八〇・四・三〇)

佐藤政夫の詩の中のユーモアは労働者の開き直った強さの中から生れてくるもの、それに読者は気付くであろう。僕は佐藤政夫とは三度ぐらい何かの会で逢っていると思うが、口数の少ない人でもっと逢っているかもしれないが、挨拶を交わす程度のことであつた。僕の印象から言うところのある人だなあと思っていた。

その佐藤政夫が詩集を出すから買つてくれ

と金子史朗から電話がきた。もう一冊の詩集にまとめる程に書いているのかと話合い、購読を快諾した。「全通の文化活動」誌上で、またその他の中で、時々ひろい読みしているが特に注目していたわけではなかった。それが今度出一冊の詩集を読んできてびっくりした。全通労働者佐藤政夫の面目やぐじ、よとして

いるではないか。僕はこの詩集はやはり開う

とても苦しい闘いが、その背景にあつて、そこを貫く労働者の楽天性ということが、その体で全肉体的でとらえられていて、見事な表現力となっているのである。

胸の名札

名札をつける

というので

どうしてつけるのか 名札を

ときいてやつた

ジカクしてもらうためだ

というので

名札がジカクするのか、

といってやつた

課長は 口をモグモグ ブツブツ

コウシュウに対してジカクしているのだ

名札はつけない

といってやつたら

長いものにはマカレロ

といいやつた

課長も いやになったのか

マカレたくないのか

定年二年前の今年

高齢退職でやめちやつた

管理者連中がジカクしてないのか

全員 心ゾウのうえに

名札をひつつけて

バタバタしているだけだった

たかが胸章の闘いといえない。このことでは金子史朗の胸章拒否の闘いのルポを読めばよくわかるが、小さい問題でも労働者の人権を主張する大きい問題を含む大切な芽を持っているのだ。職場で金子史朗の闘いに連帯する詩である。この詩集の中にちりばめられている鉱石たちは、労働と日常とが見事に統一された言葉を持っていることであらう。

そこに不自然なものを感じさせないのは佐藤政夫の今日まで働いてきた人生の深さとい

うか生き方との関係がにじみ出ている。日常の生活の中で妻や息子たちへの愛情と

言うものが無類の美しさで歌われている。

詩集の表題ともなっている作品「落書」は職場の便所の壁に書かれた落書に古参労働者である作者が(胸をブスリ)と刺される思いをする若い労働者との心のつながりを歌っているが、この精神のやわらかさは、この詩集の全体を包んでいる。

僕は主任です

僕は郵便課の主任です

二回断つてなった主任です

人の後ばかり歩いてきた主任です。

組合役員だったので断わるのが当然

当時はそのように思つたのです。

研修所の同期生二十名です

安田トリデが陥落した時です

同期生は課長・課長代理をやっています。

今も主任をやっているのは僕だけです

負けおしみではないのです

仲間をうらぎるのが嫌いだつたのです

押える力とはね除ける力の葛藤です

自分をいつわるのがたまらないのです

当局に期待される能力がないのです

抵抗するのが時には楽しかったのです

どうせ一回きりの命ですもの。

勤続二十六年、夢のような変りようです

三井三池、六十年安保の大闘争

すべてがすぎ去ってしまったのです

以来、差別を恐れない心だけが、

火種のように腹の中に残つたのです。

進歩と逆の方向へ押し流されそうです

それがたまらなく嫌いなのです。

いつか息子が言つたものです

『お父さんの生き方を尊敬できるな。』

阿呆な奴です……。

だから北京へ行つて見てきたのです

進歩と後退が判つたのです

僕はいつ迄も主任をやっていきます。

佐藤政夫の今日まで背負ってきたものの人間としての自己主張をここに見る。郵政当局のマル正合理化に働く者として労働現場で合理化の非人間性に対峙する労働者の人間性の闘いの宣言をそこにみる。すこしも気負わず詩を武器として自らを励ましていた佐藤政夫の詩集『落書』に僕もまた、詩を書くとはどういうことかの問題に答えてくれたものとして、励まされた。

(全通詩人の会刊行・東京都港区三田一丁目全通簡保支部内 定価一、二〇〇円)

七回忌

暮尾 淳

遅い桜の五丁目を
洋装して女はあるき
GIカットが口笛を吹く
ヤミ屋の時代の屋根うらに
ずしりと重い
ひとふりの日本刀。
がらくたや埃に潜み
白鞘。
錫なし。

そいつをすっかり忘れていたが
いまとなつては銘不明。
来歴不明、行方も知れず。

コスモスのふるさととは七回忌。
白刃がひかり
おれを追いつめ
汗びっしょりで夢から醒める、
新築の壁に
マリリン・モンロウ。

「ツイゴイネル・ワイゼン」

秋山 清

近藤憲二さんと芝公園のほとりを歩いていた。と向うの方に赤く大きな鉄骨の塔の下の部分組み上げられていた。後の東京タワーである。一体に未完のものは、完成後よりもはるかに大きいものを想像させる。東京タワーも完成した現在をはるかに凌駕して私にその出来上りの時を想像させたものである。

私はそれを遠くからは見てもその後まだ一度もそれに近づいたことがないままに、三十九年くらいの年月が過ぎたようだ。そして今年四月の某日、はからずもその下に行くことになった。映画を見に行ったのである。私は映画に縁遠い。私がたまに見たのは活動写真であつて、だから大正の終りから昭和のはじめにかけてで、トーカー以前のチャンバラや戦中のニュース映画にいくらか馴染みがある程度で、戦後の安保ごろから云々されたヌーベルバーグなども縁遠いことである。東京タワーを遠くから眺めるくらいの親しみ、といえるものだった。そしてそれも近ごろはますますいけない。昔文学青年として知りあつた宮島

義勇が戦後はなかなかのカメラマンで活躍し、相かわらず詩を書いている私を活字文化にこだわる時代遅れに扱つたりする。しかしそれも仕方がない。目下注目をあつめている映画「ツイゴイネルワイゼン」の試写を見せて貰つたあとで、監督の鈴木清順さんに感想をきかれても、何と応えようもなく、美しかったですネ、なんてとんだ方角ちがいのことを言つたものだった。映画「ツイゴイネルワイゼン」は怪談めいていた。製作者の意図がどこにあるかは知らぬが「怪談」たることで私はふかい興味を持つてゐる。

子どもの時からぞくぞくするようなオソロシイ、妖しい物語が好きだった私は、だから在り来りの小説はそう面白くもなく、だからといって鏡花の「高野聖」などはハナシとし迫り来る現実感がない。怪談が因果応報の物語りになつてしまつては、はじめから底が割れてるのだから、ハナシのとつかりから落ちゆく先が知れている。合理的合法的でいて、迫ってくる避け難い恐怖、そんなものを求めたくなるのである。映画「ツイゴイネルワイゼン」にはそのようなものがある。しかも私はそこにこそリアリズムを見ると主張したい思いがある。